

第7話 町の思い出

昭和30年代の館林の町は、小学生だった私には何でもある魅力一杯の場所だった。

味噌、醤油、酒など近くの万屋（よろずや）で買ったが、衣料品や靴、本等は町に行かなければ手に入らなかった。

普段は遊んでくれたことの無い父がお正月が過ぎて初市（その頃はダルマ市と呼んでいた）が町の通りで開かれると必ず連れて行ってくれた。

当時は年ごとに市のたつ通りが替わったらしい。道路の両側に沢山の赤い福入りダルマが並び、その脇に印半纏（はんてん）を着た男衆達が並び威勢の良い売り声をあげているのを見るのは楽しかった。

6月になると紺屋町の通りで夜店が開かれた。梅雨の時期で雨が続き、夜店が開けない日が続いた。

何日も待ちつづけてやっと開かれた夜店は金魚や色とりどりの風鈴を売る店が並んでいた。

≫裏面へつづく

8月の七夕祭は館林の下町の歴史のある行事。下町の各商店が競って竹細工の飾り物を長い竹に下げた。

一つ一つが立派な作品で子供心に七夕一夜で、壊すのは惜しいと思いながら両親に連れられて見て歩いた。

現在の館林の町は30年代の賑わいは無い。しかし、ここ数年、まち研に参加して、市民の町に対する関心が強まってきていることを実感した。

町に新しい賑わいが生まれてくることを信じてたい。



初市風景

次回は、七夕まつりについてのお話。お楽しみだ。